

2022 年度

ニューサウスウェールズ大学

海外日本語教育実習報告書



お茶の水女子大学大学院日本語教育コース

目次 1

巻頭言 森山新 2

第1部 実習内容 4

1. 実習の概要 (中尾祐香)
2. UNSW の日本語教育 (中尾祐香)
3. 実習の内容 (管晶)
4. その他の活動 (車睿雯)
5. 事前学習 (車睿雯)

第2部 生活 23

1. 大学の諸手続き (車睿雯)
2. 生活 (管晶)

第3部 実習での学び 31

管晶

中尾祐香

車睿雯

総評 森山新 38

編集後記 (中尾祐香) 40

## 巻頭言

森山 新

日本語教育コースの海外日本語教育実習は、2011 年度にニューサウスウェールズ大学（以下「UNSW」）と本学との間に大学間学術交流協定が締結されて以降、翌 2012 年度よりほぼ毎年のように開催されており、今年で 8 回目となる。

前回 2019 年度に 8 名の院生が参加して以来、コロナ禍で 2 度にわたり本実習は中止を余儀なくされた。前回の 2019 年度は実習の最中に新型コロナが急拡大し、実習先の UNSW は急遽オンライン授業に切り替えられた。突然のオンラインへの転換であったため、UNSW の先生方はその対応に追われ、実習生と私は、いつ帰国できなくなるかもしれない状況に、帰国の便を早めて帰国の途に着いた。

あれから 3 年の年月が過ぎ、今回はなんとか実施には漕ぎ着けた。しかしながら、コロナ禍の影響とウクライナの事態のため、航空運賃をはじめとあらゆる値段が高騰、当初予定していた研修にかかる費用は通常より 30 万円近く増加、参加を心待ちにしていた学生たち 10 名は続々辞退に追い込まれた。結局残ったのは 3 名であったが、このような困難な中にも実現にこぎつけることができたのは、学生たちの強い参加の意思と、それに応える UNSW の先生方のご厚意、そしてそうした学生に支援の手を差し伸べてくださった。尚友倶楽部のご支援ゆえであったと痛感している。

事前準備の半分はこういった物価高騰の中でいかに経費を切り詰めるかに相当の時間を費やした。そのような中、『外国語学習の実践コミュニティ』を教材に、事前学習に取り組んだ。大学という環境下でどのように実践コミュニティを形成するのか、実習生である自身はそのコミュニティにどう参加し、どのような役割を担うのか、などを学びシドニーに向かった。UNSW では、こうした理論枠組みを基盤にユニークな日本語教育を行っており、そこでの体験を通じ、学生たちは教えるとは、学ぶとはどのようなことなのかを実践の中で再認識していった。それぞれの学生たちは事前学習を通じ、彼らなりに実践コミュニティとは何かを把握し、実習に取り組んではいた。しかし実際に実践を行う中で、知識ではわかったつもりでいても実際には中々行動にならない現実を目の当たりにしていく。その一部は実践を通じて克服され、学びに至ることができたと思うが、一部は残された課題としてそれを携えて帰国した学生もいた。そういった課題は、恐らく将来参加者がさまざまな実践コミュニティに参加する際に役立てられ、克服され、より深い学びに至るであろうと思われる。

実習生はみな、日本語教育経験がない大学院生であったが、それぞれに熱心に授業の準備を行い、担当教員の指導のもと、教壇実習の授業に取り組んでおり、それぞれの立場で貴重な学びがあったようである。近年、UNSW における中国人日本語学習者が増えているという。実習参加者には中国人学生も含まれていたが、彼らが教壇に立つ姿は、そうした中国人学習者に良いロールモデルになったに違いない。また日本語を母語とし、何ら不自由なく日本語を話す実習生でも、日本語を教えることは決して容易なことではないと実感していたようである。

日本語教育を専攻とする学生たちは、単に研究者としてだけではなく、教育者としての顔も有している。さらにグローバル時代において、海外に積極的に出て行き、活動する超国家的、超文化的な社会性も必要としている。その意味でこの海外日本語教育実習の定着・発展は非常に意義深いものと言わざるをえない。また日本語教育研究は日本語教育の発展

に資することが要求され、その意味でも研究と並行して海外で日本語教育実践を伴うことは非常に好ましい形であるということができよう。そう考えると、今回、3年ぶりに海外日本語教育実習が再開できたことは、非常に喜ばしいことである。

本報告書は、参加者が実習を通じどのような学びが与えられ、どのような成長を遂げたかということを示すとともに、これから海外実習を行おうとしている学生たちに、実習のよさや意義、さらには難しさをも伝えてくれるものと思われる。この報告書を読んだ多くの学生が彼らに続き、海外に赴き、教育者としてグローバル人材として大きく成長する機会を得ていただければと思う。

最後になったが、学生を直接ご指導くださった UNSW の先生方、そして本プログラムの成功のためにご支援くださった尚友倶楽部の皆様方に心から感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

2023年3月

# 第1部

## 実習内容



初日のミーティングの様子

## 1.実習の概要

中尾祐香

今回の実習は、「日本語教育方法論演習」の授業として、2023年2月17日～3月17日の5週間にわたってニューサウスウェールズ大学（University of New South Wales,以下UNSW）にて行われた。担当教員は森山新先生、参加者は日本語教育コースの学生：博士後期課程1年の管晶、博士前期課程2年の中尾祐香、車睿雯、合計3名であった。実習期間は、3名共に初級の1年生のクラスで実習を行い、2年生以降のクラスは授業見学を行った。細かい内容については、次章以降で説明する。

表1 実習の流れ

日付	内容
2022年 4月	募集説明会
10月3日（月）	「日本語教育方法論演習」事前研修開始※1
10月31日（月）	STA トラベル担当者による渡航準備説明会
2023年 1月30日（月）	「日本語教育方法論演習」事前研究終了
2月9日（木）	出国（管晶、中尾祐香、車睿雯）
2月13日（月）	授業見学開始※2
2月16日（木）	トムソンゼミ勉強会参加※3
2月17日（金）	反省会※4
3月17日（金）	実習終了
3月20日（月）	帰国

※1 毎週の月曜日

※2 5日間全てのレベルを見学

※3 毎週の木曜日

※4 毎週の金曜日

## 2. UNSW の日本語教育

中尾祐香

### 2.1 実践コミュニティ (Communities of Practice: CoP)

実践コミュニティ (Communities of Practice: CoP) は、状況的学習論 (Situating Learning)、正統的周辺参加論 (Legitimate Peripheral Participation: LPP) を理論的背景として Lave & Wenger が提唱したものである。

実践コミュニティは、「領域」 (Domain)、「コミュニティ」 (Community)、「実践」 (Practice) の3つの要素からなり、あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団を指す。

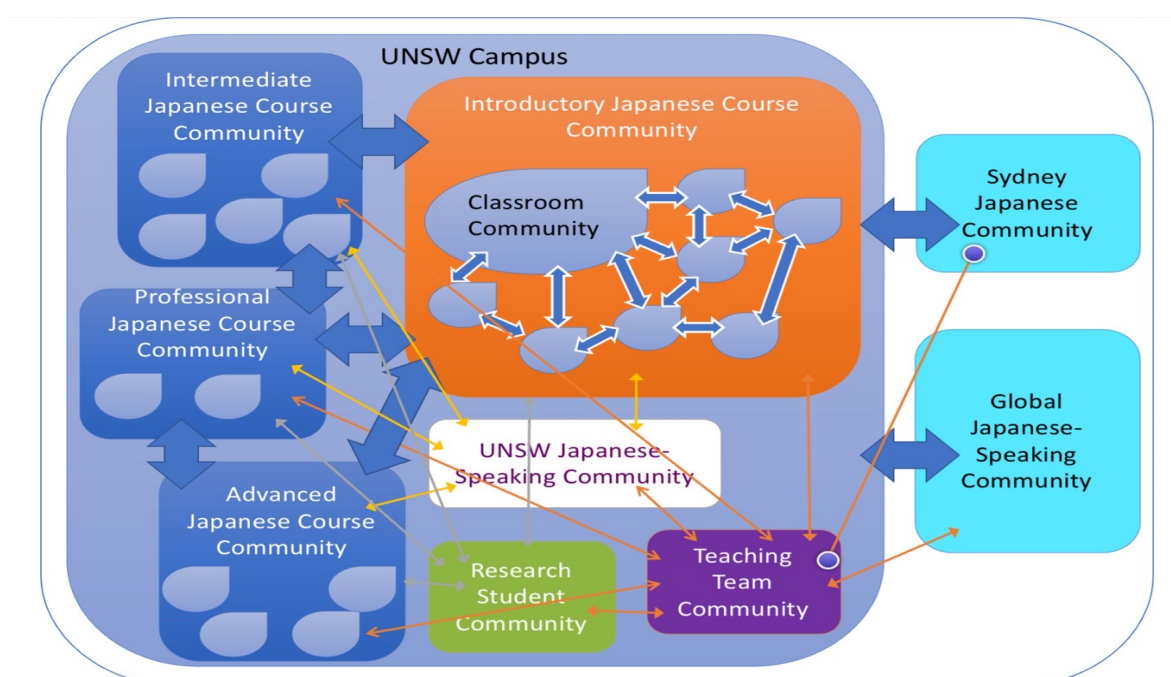


図1 UNSW Japanese Community of Practice  
(トムソン先生作成)

図1のように、UNSWの日本語コースでは、教師チームが実践コミュニティの観点から、学内に位置する日本語プログラム全体を大きな実践コミュニティにデザインする。日本語を学び日本語で様々な活動を行うことを「領域」、多様な活動の場として「コミュニティ」を提供し、各クラス、各レベルなどをそれぞれ1つの「コミュニティ」と考え、様々な「実践」が各所で起こっている。各コミュニティは個々に独立しておらず、相互に交流が行われる大きなコミュニティの場で共存している。

### 2.2 実践コミュニティの必要性

JFL環境の教室内で行われる外国語教育の授業は、学習者が生の日本語に接触したり、日本語を使用したりする機会が少ない。そのため、伝統的な枠を超え、教室外(社会活動など)で必要とされる実践を教室で行うことで、日本語の実際の使用場面を作

り出すことが期待できる。さらに、学習者が他者との相互作用のなかでどのように自身の能力を高めていけばよいのかを理解することができる。

### 2.3 ジュニア先生・ヘルパー

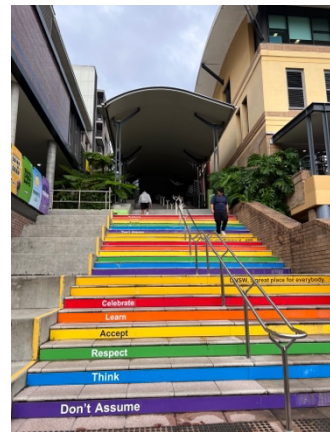
ジュニア先生とは、Japanese 7 以上の学生が Japanese1 または 2 のコースにジュニア先生として参加する Japanese 7 コースのプロジェクトの 1 つである。面接を受けて Japanese 1 のジュニア先生となった学生は授業前に授業の担当教師と対面のミーティングを行ってから授業に参加する。また、Japanese 3 を担当するジュニア先生は One Note にログインし、授業前に授業の流れ等を確認してから授業に参加する。ジュニアセンセは授業中に学生の質問に答えたり、学生のペアになって練習を助けたり、モデル会話を見せたりする。自己目標などのある「契約書」を記入し、担当教官の評価を受ける。

ヘルパーとは、主に Japanese 5 の学生が Japanese 1 のチュートリアルやセミナーに参加し、学生の学習たちの手助けをしたり、教師の指示に従い発話したり、見本を提示する。ジュニア先生とは異なり、授業前ミーティングに参加するといった事前準備はない。しかし、活動条件として授業の直前に担当教師に簡単な自己紹介と参加する旨の挨拶をすること、授業の始めから終わりまでの 2 時間参加すること、「講義記録参加シート」に教師から出席を証明するサインをもらい、後日授業の内容、自分が学んだこと、授業中の活動について項目に記入して提出するという手順を経ることである。

下級生にとって、ジュニア先生やヘルパーの日本語が上手な場合、あるいは反対に先輩であってもピッチなどの間違いもすることで、日本語を勉強する過程をある程度見出すことができ、将来の自分を想像し、これからの学習目標を明確にすることができる。

上級生にとっても、下級生と交流する機会が増えるだけでなく、Japanese 7 の授業の場合、多くのドリル、会話練習をすることがなくなる。そのため、Japanese 7 の学生がジュニア先生を担当することで、先生と日本語で話す機会が多くなり、話す能力を伸ばすこともできる。また、後輩を支援することで、自分の成長を実感することができるほか、後輩の質問に答えることで達成感を感じ、自信が持てるようになる。加えて、中級以上になり学習動機が低下することを改善する効果もある。さらに、教えるためには自身も勉強をし直さなければならないので、自律的・持続的な学習を促進できる。

以上述べたように、ジュニア先生またはヘルパーは、上級生と下級生の実践コミュニティにおいて、レベル間の交流を活発に行う存在である。



### 2.4 Moodle

UNSW の公式ホームページからログインして入る学習用に作られた UNSW の学習管理システムである。Moodle は授業に関する資料、課題提出、プロジェクトについてのディスカッション、自己紹介ページ、先生への質問などに使用されている。Moodle は教室内の授業と異なり、オンライン上の授業時間外におけるコミュニティの結びつきに役に立つと考えられている。

Moodle が学生により活発に利用されるのは、Japanese3 の 2 年生に上がった以降である。2 年生からは「JF Reading Night」、「Event participation」、「NSA Japanese Language Workshop」などの様々なプロジェクトが実施され、これらの課題の提出やクラスメートの課題に対するコメントなどは Moodle 上で行われる。今回実習生は 1 年生の授業を担



当したため、主に Moodle を利用して授業用の資料をダウンロードしたり学生の自己紹介を閲覧したりすることは可能だったが、学生とディスカッションすることはなかった。

## 2.5 クラス編成

各クラスの編成と担当教員は以下の通りである。

これまで使用されていた UNSW の言語コースは、Introductory、Intermediate、Advanced、Professional というコース名であったが、本年度から他大学で一般的に使用されている「Japanese 1~Japanese 8」というコース名に今年から変更された。クラス編成と担当教員は以下の通りである。

表2 クラス編成と担当教員

クラス		専任講師	非常勤講師
日 本 語	Japanese 1 (旧 Introductory)	トムソン先生、福井先生、 橋本先生、岡本先生	鄭先生、中島先生
	Japanese 3 (旧 Intermediate)	飯田先生	大浜先生、赤木先生
	Japanese 5 (旧 Advanced)	岡本先生	
	Japanese 7 (旧 Professional)	橋本先生	

### 3.実習の内容

管晶

ここでは実習の内容を概観する。1 節で初級 (Japanese1)、2 節で中級 (Japanese3)、3 節で中上級 (Japanese5)、4 節で上級 (Japanese7) について述べる。今回は実習生が 3 名であったため全員が初級クラスのみを担当し、中・上級クラスは見学の形で参加したため、以下は初級クラスを中心に述べる。

#### 3.1 Japanese1

##### 3.1.1 コース概要

1 年生を中心とした日本語初級前半のコースであり、学生は 1 週間で、Lecture 2 時間、Tutorial 2 時間、Seminar 2 時間の計 6 時間の授業を受ける。実習生は下記表 3 の赤枠の授業を担当した。

担当教官：トムソン先生、福井先生、大浜先生、鄭先生、赤木先生、中島先生

実習生：管晶、車睿雯、中尾祐香

使用教材：『げんき I』『げんき I ワークブック』『コースノート』\*

\*『コースノート』は、活動シートや目標会話など、『げんき I』を補うための教材として使われる。

表 3 時間割 (Japanese1)

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日		
9-10		Mat 308	Mat 306	Mat 308	MB LG2	Mat 308	
10-11		Y. Hashimoto	C. K. T	C. K. T	K. Okamoto	K. O	
11-12		MB G4	MB 308	MB G6	Mat 308	MB LG2	Mat 308
12-13		Y. H	C. K. T	N. F	C. K. T	K. Okamoto	Y. Zheng
13-14	講義 Rex Vowels				MB LG2	MB LG2	
14-15	C. K. Thomson	MB G6	JGL LG21	JGL LG21	N. F	Y. Nakajima	
15-16		N. Fukui	Y. H	N. F		MB LG2 tentative	
16-17		MB G3		Mat 309 tentative	Mat 306		
17-18		N. F			Y. H		

注) 黄色はレクチャー、青はチュートリアル、緑はセミナーのことを指す。

##### 3.1.2 学習目標

本コースを通じて学生が達成する目標は主に以下の 4 点である。

1. 自分が体験した出来事を描写・叙述し、それに対する感想を複雑な文型で日本語で表現することができる。
2. 自分の口頭で話した日本語と文章で書いた日本語に存在する問題に気づき、評価することができる。
3. 日本に関する知識および日本語コミュニケーション能力をパフォーマンスする。
4. 日本語の読み書きに必要な漢字 95 字・仮名を適切に選択し、使用する。

### 3.1.3 Lecture

1年生のLectureの担当先生はトムソン先生である。今学期の第2週までは出席者が220名程度であったが、授業の最終登録週となる第5週では190名程度になった。主に日本語初心者向けの日本文化の紹介、『げんぎ1』の単語、文法事項の説明やドリル練習などを行う。Lectureの資料（パワーポイント）は学生が予習できるように毎週の講義が行われる前にMoodleにアップされる。その他、宿題のスケジュールもアップされている。

Lecture1は毎週月曜日の13-15時に大講堂で行う。授業の始めに、日本文化のビデオを流し、その場にいる学生たちを日本の世界へ導く。ビデオ終了後、今週の授業に関する連絡事項を確認する。第1週目の講義では、言語学習のストラテジーや日本語学習する際に利用できるオンラインリソースを紹介する。その他、1学期中の宿題のスケジュールも提示する。

その後、今週の目標会話に関する表現や文法項目の説明があり、学生は質問に対し手で○と×を示したり、あるいは指で数を出したりと大教室で行われる授業であっても、学生たちが積極的に参加できるような工夫をしている。次にlearning checkというセッションがあり、学生がPPTに掲載されているQRコードをスキャンし、先週の授業で導入した新出語彙や文法に関するいくつかの質問に答える。その回答結果と答えを次の週にPPTで提示し、みんなで一緒にチェックできるようにしている。その次に、新しい語彙と文法を導入後、それらを使った会話文を提示し、学生にペアで会話を練習してもらう。休憩時には事前にMoodleで募集した学生からのリクエスト曲を1曲選んで流す。授業の最後はジュニア先生からのデモ会話についてのパフォーマンスがある。それを2回聞いた後に、クラス全員が役割分担して、その会話文を一緒に読む練習をする。

### 3.1.4 Tutorial, Seminar

Tutorialには9つのクラスがある。各クラスの学生数は22名程度である。担当する先生はトムソン先生、福井先生、橋本先生の3人である。2時間の授業で、宿題チェック、Lectureで導入した学習項目の復習及び応用練習を教材やコースノートを使って行う。

Seminarも9クラスある。担当する先生はトムソン先生、福井先生、橋本先生、岡本先生、鄭先生、中島先生の6人である。学生は時間割の関係で、どの時間帯の授業を受けるかを定めるため、だいたいSeminarとTutorialとは異なるクラスに入り、異なるクラスメートと一緒に練習活動を行うことになる。

Seminarでは学生が自分たちでクラスの名前をつける。2時間の授業で、宿題のチェック、Tutorialで導入した学習項目をよりハードルの高い練習問題でペアやグループ練習を教材、コースノートを使って行う。その週のまとめとして、ロールプレイができるようになることが大きな目標である。

### 3.1.5 実習内容

主な実習内容は教壇実習と他の授業への見学である。1年生の教壇実習は毎週火曜日と水曜日のTutorial、および木曜日のSeminarで行った。実習生3人がそれぞれ異なるセッションを担当し、共同で1つの授業を行うという形で実習を行った。

毎週の実習の流れについては、月曜日のLecture1に参加し、その週に学生に身につけてもらいたい挨拶、あいづち、語彙、文法などを把握する。また、火曜日の1限目のTutorialクラスをまず見学することにした。その際、実習生はペアがいない学生の練習の

サポート、学生の質問への対応等をした。同時に、授業の時間配分や活動の進め方、そして学生たちの反応を観察し、自分の教案を調整した。

Tutorial での活動内容は大きく 3 つの部分に分けられる。最初は宿題のチェックを行う。次に、その週の講義で導入した新しい語彙と文法項目の練習を行う。練習にはいくつかの段階があり、最初は単語の音読、次に単語とそれとよく一緒に使う動詞を組み合わせる練習、そして簡単な会話文の代入練習、最後は自分自身について言う練習である。実習生は、各活動において、学生に多く話す練習をしてもらえるようにペア練習と全体確認の進め方を工夫したり、時間をコントロールしたりする役割を担った。また、担当する部分を実習生 3 人で交代した。全部で 4 つの Tutorial があるため、クラスを変えるたび、担当セッションを変えるようにした。

Tutorial の教壇実習は Week2 から始まり、Week2 から Week5 まで少しずつ担当時間を増やして行った。取り組み内容は以下の表 4 のようになる。Tutorial 終了後、実習生と福井先生で反省会を行い、各々の実習生がその日にうまく進めた部分とそうでない部分話し合い、改善する必要があるところは一緒に解決策を考えた。そのコメントに基づき、再度教案を調整し、次の日の授業に臨んだ。

表 4 Tutorial の実習内容 (Japanese1)

Week	授業内容	実習生の取り組み
1	講義の復習 自己紹介あいさつ ひらがな	見学 (学生のサポート)
2	1～100 の数字練習 時間の読み方 大学名・学年 ひらがな	50 分 宿題チェック 数字の読み方のドリル 時間の読み方と聞き方の会話練習
3	自己紹介 (出身・大学) Diction test ひらがな	90 分 宿題チェック 出身と大学を聞く練習
4	ディクテーションクイズ 名詞+否定表現 値段、大きな数字 (千、万) ひらがな	120 分 宿題チェック 単語の読む練習 名詞+否定表現 (～じゃないです) の会話練習 大きな数字を読む練習 値段を聞く練習
5	時間の復習 移動動詞 (～に 行きます)・行動動詞 (～を見ます) 等 カタカナ	120 分 宿題チェック 「を、で、に」の応用練習 移動動詞、行動動詞の応用練習 カタカナの書く、読む練習

実習生は Week3 から Seminar を担当することになり、担当時間を少しずつ増やし、Week5 では丸 2 時間を担当した。Tutorial と異なり、Seminar の最後のセッションでは学生同士でピア評価を行う活動が設けられている。実習生はそのためのモデル会話やグループ分けや

時間のコントロール役割を担った。Seminar では会話練習に重点を置いているため、モデル会話を披露するジュニア先生も授業に参加している。毎週の月曜日にジュニア先生との打ち合わせがあり、そこでモデル会話を事前に練習してもらおう。Seminar 終了後、福井先生との反省会を行い、学生たちの練習時間の確保、および最後の長めの会話ができるようにする準備活動の展開の効果に重点を置くことを心掛けた。

表 5 Seminar の実習内容 (Japanese1)

Week	授業内容	実習生の取り組み
1	自己紹介 あいさつの練習 ひらがな	練習活動のサポート
2	数字の練習 学年を聞く練習 ひらがな	練習活動のサポート
3	大学生としての自己紹介 名前・大学・学部・学年・専攻 ひらがな	90分 宿題チェック 名前・大学・学部・学年・専攻の練習 と自己紹介 まとめのロールプレイ (ピア評価)
4	こ、そ、あ、どの表現 正しいピッチでの音読 先生の部屋を訪問する会話 カタカナ	90分 宿題チェック こ、そ、あ、どの練習 単語の音読練習 先生の部屋を訪問する会話練習 まとめのロールプレイ (ピア評価)
5	場所と時間を表す表現、助詞・動詞を使った会話練習 音読 カタカナ	120分 宿題チェック 場所と時間を表す助詞 基本動詞を使った会話練習 まとめのロールプレイ (ピア評価)



実習風景 (Japanese1)

## 3.2. Japanese 3

### 3.2.1 コース概要

2年生を中心とした日本語中級前半のコースであり、学生は1週間で、Lecture 3 時間 (Lecture1: 2 時間、Lecture 2: 1 時間)、Tutorial 2 時間の計 5 時間の授業を受ける。実習生は week1 から下記表 6 の赤枠の授業を見学した。

担当教員：飯田先生

使用教材：『げんきII』『げんきIIワークブック』『コースノート』

表 6 時間割 (Japanese3)

Japanese3					
時間	月	火	水	木	金
9-10				Tutorial	Tutorial
10-11					
11-12					Tutorial
12-13				Tutorial	
13-14			Lecture1		Lecture2
14-15					
15-16					
16-17					
17-18					

### 3.2.2 学習目標

本コースの目標は、主に以下の 5 点である。

1. 自分の経験を基に、出来事を語り、複文を使用して自分の考え方を日本語で表明できる。
2. 産出（話す書く）能力を身につける。
3. 自分の産出における問題を認識し、評価できる。
4. 対面及びオンライン活動やイベントの参加を通して、日本或いは日本語の知識と日本語のコミュニケーション能力を応用できる。
5. 日本語の読み書き活動において、適切な漢字（95 の新しい漢字を含む）、仮名を選んで使用できる。

### 3.2.3 Lecture

Lecture の資料は学生が予習できるよう毎週授業が始まる前に Moodle にアップされている。毎週水曜日のレクチャーでは今週の話題に関連のある日本文化を紹介してから、新しい文法項目を様々な身近な出来事に関する例文から導入し、それを使う場面、および文法、文法項目ごとに練習問題を出し、学生にペアで相談しながら答えを考えるように指示する。

金曜日のレクチャーは 1 時間のみで、始めは今週導入した項目について、いくつかの練習問題を学生に答えてもらうという形で短めに復習する。次に、新出漢字の書き方、読み方（訓読みと音読み）を紹介する。その際、当該漢字がよく使われる単語も一緒に紹介している。最後の 10 分間は 8 問ほどの文法項目の練習問題のワークシートを配り、答えてもらった後に回収する。ワークシートは出席表にもなっている。

### 3.2.4 Tutorial

Tutorial は4つのクラスに分けられている。各クラスの登録者数は20名程度である。授業の構成としては、宿題のチェック、教材とコースノートを使って目標文法の代入練習、最後は目標文法を使って自分の考えを話す運用練習や会話練習という3つの部分に分けられる。

どのレベルの授業を受けるかはプレースメントテストによって決めるため、2年生のクラスには1年生のクラスからそのまま上がってきた学生のほか、以前から日本にルーツを持っている学生や、高校ですでに日本語を勉強していた学生や独学で勉強して初中級レベルになった学生など、日本語を勉強している様々な学生が集まっている。そのため、語彙の量や会話する流暢さや正確さなどに差が出ており、練習する際にはお互いに助け合いながら行っていた。

表7 授業内容と実習生の取り組み (Japanese3)

Week	授業内容	実習生の取り組み
1	アルバイト1 ・自己紹介 ・potential form (動詞の可能形) ・～し、(～し) ・漢字: 物 鳥 料 理 特 安 飯 肉	見学 ・宿題チェックの手伝い ・練習活動を行う際、各グループを回って、学生をサポート
2	アルバイト2 ・～そうだ ・～てみる ・～なら ・(period) に (frequency) ・漢字: 悪 体 空 港 着 同 海 昼	
3	贈り物1 ・あげる、もらう、くれる ・ほしい/Vたい (ほしがる/Vたがる) ・かもしれない ・漢字: 彼 代 留 族 親 切 英 店	
4	贈り物2→旅行1 ・～たらどうですか ・も、しか～ない ・Volitional form (意志形) ・～と思う ・漢字: 去 急 乗 当 音 楽 医 者 死 意 味 注	
5	名詞句 意志形 (～ようと思う) あげる・くれる・もらう 漢字: 走, 建, 地, 場, 足, 通	

### 3.3 Japanese5

#### 3.3.1 コース概要

3年生を中心とした日本語中上級のコースであり、学生は1週間で、Lecture 3 時間 (Lecture1:2 時間、Lecture2:1 時間)、Tutorial 2 時間の計 5 時間の授業を受ける。実習生は week2 に木曜日のレクチャーを、week4 から月曜日のレクチャーを見学した (表 8 の赤枠を参照)。

担当教員：岡本先生

使用教材：主教材『上級へのとびら コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語』

表 8 時間割 (Japanese5)

時間	月	火	水	木	金
9-10			Tutorial		
10-11					
11-12					
12-13					
13-14			Tutorial	Lecture2	
14-15					
15-16					
16-17	Lecture1				
17-18					

#### 3.3.2 学習目標

本コースの目標は、主に以下の3点である。

1. 日本、日本文化、日本社会について意見交換できる。
2. 日本語の文体で、文章、エッセイを書く。
3. 仲間とともに課題を達成する。

#### 3.3.3 Lecture

##### Lecture 1

日本語3年生を対象とする授業である。登録者数は60名程度であった。最初は3~4問の練習問題を用い、先週の既習文法の復習をする。次にその週のテーマに関する新しい語彙を導入するが、その際、ビデオや記事を見せて、日本文化も一緒に紹介する。そして、新しい文法項目を導入する。文法知識の説明より、それがどのようなポジションの人が、どのような場面で使われるか、またどうやってそれを使って会話を完成するのかに重点を置いて教えている。2時間で4つ程度の文法を導入し、その後その場で練習問題を出し、学生にペアで答えを考えてもらう。

前半が終わる頃に、先週の既習項目の聞くと書く練習活動として dictation をし、約5分の休憩時間で、学生がリクエストした日本の歌を流しながら、答えをチェックしてもらった。授業の後半は新しい文法項目の練習の続きをする。最後の15分間は、4~5人により構成された漢字先生が自分たちで考案し、出題した約10問の練習問題を出し、クラスの学生に答えてもらった。

##### Lecture 2

3年生全体を対象とし、主教材の読解文の語彙と内容理解にフォーカスする授業である。



授業の始めに、ウォーミングアップとして読解文のトピックに関連する会話の活動を行う。語彙は、主に読み方と意味の確認となる。内容理解は、読解文のオーディオを聞いた後、その内容に関する読解質問をペア同士で解いてもらうという形で進めた。その後、何人かの学生を指名し、教材に書かれた文ではなく、自分の言葉でまとめて答えるよう奨励する。

授業内容と実習生の取り組みは以下の表 9 の通りである。

表 9 授業内容と実習生の取り組み

Week	授業内容	実習生の取り組み
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己紹介</li> <li>クラスの命名</li> <li>日本文化</li> <li>あいづち</li> </ul>	見学 <ul style="list-style-type: none"> <li>宿題チェックの手伝い</li> <li>練習活動を行う際、各グループを回って、学生をサポート</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>日直</li> <li>宿題チェック</li> <li>会話 あいづちとフィラー</li> </ul>	
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>日直</li> <li>宿題チェック</li> <li>会話 依頼と感謝（基礎）</li> </ul>	
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>日直</li> <li>宿題チェック</li> <li>会話 依頼と感謝（発展）</li> </ul>	
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>日直</li> <li>宿題チェック</li> <li>カタカナ</li> <li>それに、(Nと) 同じぐらい、の/この/その/あのほかにも、N/adj.+型</li> </ul>	

### 3.4 Japanese7

#### 3.4.1 コース概要

4年生を中心とした日本語上級のコースであり、登録者数は20程度であった。学生は1週間で、Lecture 2時間、Tutorial 2時間の計4時間の授業を受ける。実習生はweek3から木曜日のチュートリアルを見学した（表10の赤枠を参照）。

担当教員：橋本先生

使用教材：当週のトピックに関連する資料

表 10 時間割 (Japanese7)

時間	月	火	水	木	金
9-10					
10-11					
11-12				Tutorial	
12-13	Lecture				
13-14					
14-15					
15-16					
16-17					
17-18					

### 3.4.2 Tutorial

学期末の課題として対話劇を作る課題が設定されている。Week1 から Week5 の tutorial では、この課題に向けていくつかの段階を踏み、様々な準備活動を行っている。最初は書き言葉や話し言葉の違いについてメールや会話文を例示しながら、学生にペアでディスカッションしてもらった。翌週では、書き言葉を話し言葉に変換、またはその逆の活動を行った。その際、書き言葉も話し言葉も場面によって何種類の形があることに気づかせ、さらにそれぞれの特徴について考えさせた。その次の週では、対話と会話の違いについて述べられた読み物を用い、両者の違いについてディスカッションした。

授業の構成としては、始めに、テキストの文章をグループ別に一緒に音読してもらう。次にテキストの練習問題を各グループに振り分け、再度ペア活動を行う。ディスカッションが終わった後、各グループに答えとそう答えた理由をクラス全体でシェアしてもらう。他のグループはそれに対して賛否を問うような形で授業が進行していった。

表 11 授業内容と実習生の取り組み

Week	授業内容	実習生の取り組み
1	書き言葉と話し言葉	見学 学生のグループに入り、課題を一緒に完成する 授業のトピックに関する意見交換をする
2	書き言葉と話し言葉 (応用編)	
3	対話と会話	
4	劇に関する読み物の購読 1	
5	劇に関する読み物の購読 2	

## 4.その他の活動

車睿雯

ここでは実習以外の活動について述べる。

### 4.1 月曜ミーティング（毎週月曜日 11:00-12:00）

毎週月曜日に福井先生とジュニア先生のジェysonさんと一緒に打ち合わせを行っていた。実習生全員が今週のチュートリアルとセミナーの教案を発表し、福井先生に講評をいただいた。そして、セミナーでジュニア先生に協力していただく内容について、ジュニア先生に相談した。それ以外、実習生は先週自分が立てた目標が達成できているか、反省点と良かった点を報告した。

このミーティングは、教案の細かいところまで検討し、先生に確認していただく大変貴重な場であった。また、ミーティングに参加することで週末の雰囲気から切り替え、新しい1週間の授業に臨むことができた。

### 4.2 トムソン先生勉強会（毎週木曜日 16:00-18:00）

教育実習生の UNSW における立場は Visiting Junior Research Fellow である。そのため、毎週木曜日のトムソン先生の勉強会に参加させていただき、研究活動を推進した。今年は、海外に滞在している方がいたため、勉強会をオンラインで行い、Zoom で参加させていただいた。

実習生は毎週1名ずつ、研究内容を報告した。実習生2名（車睿雯、中尾祐香）は博士前期課程の2年生であり修士論文を執筆し完成していたため、修士論文の内容を発表し、その後先生方やゼミ生からのご質問に回答し、コメントをいただいた。実習生の管晶さんは博士後期課程の学生であるため、自分の現段階の研究を紹介し、先生方とゼミ生からのコメントとご意見をいただいた。

実習生の3人は、自分の大学とは異なる場で研究計画を発表する機会をいただき、研究を客観的に見つめ、考え直すことができた。

参加されている先生方は授業を実践する教育者であるが、同時に研究者として活躍されており、ご自身の経験を基に、的確なアドバイスをいただいた。

### 4.3 土曜学校の訪問

日時：2023年3月4日（土） 10:00-11:00

場所：NSW 日本語補習校（NSW Japanese School）

住所：Liverpool Rd, Ashfield NSW 2131

最初は森山先生が当該学校の運営代表にメールでご連絡してくださり、授業見学の承諾をいただいた。当日の9:50分ごろ、学校の正門に集合し、土曜学校の先生方とお会いした。主に小学部の授業をご見学させていただいた。最初は1人ずつ違うクラスに入り、全てのクラスを見学できるよう各クラス10分程度授業を拝聴した。最後は実習生3人共に小学1年生のクラスに入り、授業を見学した。



授業見学後、学校や児童のことについて先生方や運営スタッフの方に質問する機会をいただくことができた。

日本や中国での外国人向けの日本語教育と比較すると、土曜学校での日本人や日本にルーツを持つ子ども向けの日本語教育はかなり異なっていた。授業目標や雰囲気も私たちが慣れている日本語教育と異なっていることが多いと実習生の3人が感じていた。オーストラリアで、継承語教育を行っている日本語教育について見学することができ、実習生にとって貴重な実習体験となった。

#### 4.4 Japan and Korea

講師：Dr. Gregory Evon

参加日：毎週水曜日 10:00-13:00

UNSW における日本語コース以外の日本研究領域のコースとして、Evon 先生の「Japan and Korea: Cultures in Conflict」の講義に参加した。このコースは毎週水曜日に3時間の講義がある。実習生の管晶さんは Week 1 の水曜日の講義に参加し、車睿雯と中尾祐香さんは Week 5 までの水曜日の講義に参加した。

この授業は英語で行なわれた。主に 19 世紀後半の日韓関係や両国の国際社会との関わり等について説明した。たとえば、明治維新、福沢諭吉、韓国の三・一運動、韓国の民族主義、政治と宗教の関わりなどについて討論した。

講義の場所は大講堂だが、Evon 先生が学生に頻繁に問いかけ、学生が答える、双方向のスタイルで行われた。学生の中には先生の問いかけに対し、非常に詳細に答える学生もいた。日韓の文化や歴史について情熱をもって勉強していることがうかがえた。

この授業を通じて、日本の歴史や文化について、海外の大学生がどのように学んでいるのかを見ることができ、大変貴重な機会であった。



新学期開始時、日本文化紹介のために UNSW の学生に浴衣姿を披露

## 5.事前学習

車睿雯

ここでは実習以前に行った様々な学習について述べる。

### 5.1.日本語教育実習（2022年度前期・木曜日7～8限）

#### 5.1.1 概要

この授業は UNSW におけるオーストラリア日本語教育実習に参加する者にとって必須項目となる。これまで日本語教育現場での指導経験が全くない、あるいは限定的な学生を中心とし、日本語教師に求められる基本的な知識や技能を学ぶ。具体的に、教材分析、教案作成、模擬授業など、実践的展開を試みる。

#### 5.1.2 内容

前半は講義で、後半は模擬授業という形で進めた。

表 12 授業日程

	月日	内容
第1回	4月22日	オリエンテーション これまでの「授業」を振り返る
第2回	5月6日	学習者を知る (日本語とどこで出会っているか→ニーズ分析)
第3回	5月13日	日本語教科書を知る (テキスト分析)
第4回	5月20日	初級クラスに登場する文型
第5回	5月27日	教材、教具について
第6回	6月3日	日本文化紹介レッスン デモンストレーション
第7回	6月10日	ティーチングプラン・教案
第8回	6月17日	ティーチングプラン・教案作成作業
第9回	7月1日	ティーチングプラン・教案発表
第10回	7月8日	模擬実習 (1)
第11回	7月15日	模擬実習 (2)
第12回	7月22日	模擬実習 (3)
第13回	7月29日	模擬実習 (4)
ALH		論文購読

(シラバスを引用)

- ・ 講義：学習者と教材について考え、理解する。教案の重要性、作成方法を勉強する。
- ・ 模擬授業：2人1グループになり模擬授業を行った。具体的には、グループのメンバーで相談し教案を作成した。教員から作成された教案についてコメントと指導を受け、教案を修正した。1グループで1回の模擬授業を行った。模擬授業を行う際に、残りの受講生は学習者役を担い、実習する人の良い点、改善すべき点などについて模擬実習評価表を記入した。模擬授業を録画し、授業の後に実習する人に送った。

模擬授業を行った受講者は録画を見て、文字起こしを行い、次回の模擬授業に向けて自分で反省点をまとめ教師に提出した。

### ・サマープログラム

2022年7月17日（土）と7月18日（日）に、2人のグループでお茶大のサマープログラムの日本語体験レッスンを担当した。バングラデシュ、スペイン、マレーシア、UK、ブラジル、フィンランド、ニュージーランド、韓国、ドイツ、ハンガリー、アメリカ等様々な国からの学習者がオンラインで参加してくれた。参加者の日本語レベルはN5程度であったため、英語で授業を行った。実習生にとって良い経験となった。

## 5.2 日本語教育方法論演習（2022年度後期・月曜日9～10限）

### 5.2.1 概要

2022年度の後期にお茶の水女子大学で「日本語教育方法論演習」という授業が開設された。UNSW 日本語教育実習の準備のために、森山新先生による事前指導が行われた。授業内容として実習とオーストラリアでの生活に関する準備の相談が行われた。また、UNSW の日本語教育に関する文献を読み、実習生は毎週発表した。

テキストは、トムソン木下千尋（編）（2017）『外国語学習の実践コミュニティ：参加する学びを作る仕掛け』を使用し、実践コミュニティの理論とその事例である UNSW での日本語教育について検討した。以下、シラバスに書いてある授業の目的を引用する。

春休みに協定校（オーストラリアのニューサウス・ウェルズ大学他）にて日本語教育実習を行うために事前に日本語教育の基本を学んだ上で実習を行い、自身の第二言語教育スキルと教育研究を深化させる。

表 13 授業日程

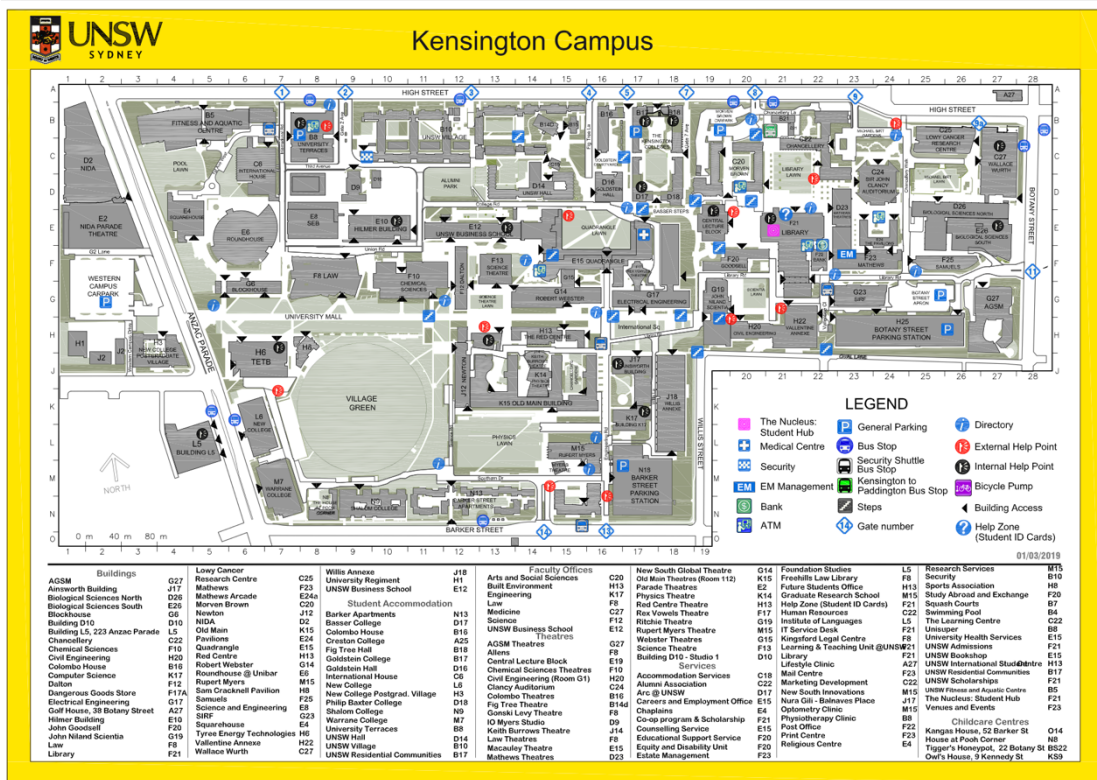
	月日	内容
第1回	10月3日	オリエンテーション 授業内容と授業の進め方を相談する 受講者の疑問を確認する
第2回	10月10日	仲介会社の担当者とビザ申請書類、航空券、保険料などについて 打ち合わせ
第3回	10月17日	HR20、CVを作成する
第4回	10月24日	宿泊施設について検討する
第5回	10月31日	諸手続きの最終確認
第6回	11月7日	教科書の第1章「外国語学習というチャレンジと実践コミュニティ」 について発表者を中心に検討する
第7回	11月14日	教科書の第2章「『実践コミュニティ』とは？実践コミュニティ の理論」について発表者を中心に検討する
第8回	11月21日	教科書の第3章「ニューサウスウェルズ大学という教育現場」 について発表者を中心に検討する
第9回	11月28日	教科書の第4章「最初の日本語コース」について発表者を中 心に検討する
第10回	12月5日	教科書の第5章「実践コミュニティの視点で内省する初級後 半レベルのスピーチプロジェクト」について発表者を中心に

	検討する	
第 11 回	12 月 12 日	教科書の第 6 章「漢字学習の実践コミュニティ」について発表者を中心に検討する
第 12 回	12 月 19 日	教科書の第 7 章「Wikispaces のコミュニティ「食ベログ・プロジェクト」」、および第 8 章「中級後半コースの内と外での実践コミュニティの構築」について発表者を中心に検討する
第 13 回	1 月 16 日	出発準備、受講者の質問に答える

### 5.2.2 内容

全 15 回で、第 1 回は、授業内容と授業の進め方を相談し、受講者と質疑応答を行った。新型コロナウイルスの影響で、国際移動や海外滞在の手続きは従来の形より複雑になったため、第 2 回目から第 6 回目は旅行会社の担当者との打ち合わせや手続きの準備を行なった。第 7 回目からテキストを使い、授業を行なった。発表担当の学生がレジュメを準備し、リーダーとなって各章を検討し、参加者全員でディスカッションを行った。

# 第2部 生活



UNSW のキャンパスマップ



## 1. 大学の諸手続き

管晶

### 1.1 学内 ID カード

ID カードには教員用の ID 番号が記されており、それを使って学内システムの Moodle に登録することが可能である。そして、特定のビルや控え室に行く際に必要となる場合もあるため、学内では常に着用する。学内 ID カードを発行する場所はキャンパス内の Campus Security である。

実習初日にトムソン先生に ID カードの発行場所に案内していただいた。事前にパスポートを用意しておく必要がある。また、ID カードに載せる写真もその場で撮影した。



### 1.2 学内 ID アカウントとパスワード

ID カード発行後、トムソン先生にログインする方法を教えてください、UNSW のホームページで学内 ID アカウントとパスワードを設定した。ここでパソコンの設定もするため、正常に設定できる場合は 30 分程度で終わる。このアカウントとパスワードは、学内 Wi-Fi や大学のパソコンの利用時、および学内サイトにログインする際に必要になる。

なお、パスワードは初期設定後、任意のものに変更可能である。後で分からなくなると困るので、パスワード変更時には、手元にメモを残しておいたほうがよい。

### 1.3 学内で主に利用する設備

#### 1.3.1 C20 (Morven Brown)

UNSW の建物には全て記号と名称が付いている。実習中最もよく使う建物が Morven Brown C20 (よく MB と略して呼ぶ) である。C20 の 2 階には、日本語の先生方のオフィスがあり、実習生の控室や印刷室、給湯室などは全部この建物にある。日本語の授業はこの建物以外に、キャンパス内の少し離れた建物でも行われることもある。



#### 1.3.2 実習生控室

今回は C20 の 2 階に実習生用の控室を用意していただいた。授業の前後や休憩時間に利用した。備え付けのパソコンはないため、自身のパソコンを持参する必要がある。なお、同じフロアに常勤の各先生方のオフィスや、非常勤講師の方々が共同で使用されている部屋もある。

### 1.3.3 印刷室

C20 の 2 階には印刷室が 2 つある。USB を接続すると無料で印刷でき、教科書の必要な部分をスキャンしたりすることもできる。印刷用紙も無料で提供されている。

### 1.3.4 お茶室・給湯室

C20 の 2 階には大きめのお茶室が 1 つあり、電子レンジ・冷蔵庫や食器の洗い場などが備え付けられており、飲食用のスペースもある。お湯や飲用の水をここでマイボトルに汲むこともできる。この部屋の他にも、電子レンジ・食器の洗い場・給湯器等のみ備え付けられてある小さな給湯室もある。

### 1.3.5 図書館

図書館は UNSW の文字が書かれている高い建物で、大学のシンボリックな存在である。実習生も自由に入出りできる。各フロアには、個人勉強用の空間、グループワーク用の空間、テレビ付きの部屋、休憩できる場所、silent learning の空間などの様々な形態の勉強スペースが多数用意されており、実習中の空き時間には図書館で実習の教案作りや報告を書いたり、書籍や論文を探したりことができる。

なお、UNSW のキャンパス内で図書館システムにアクセスすると、様々な資料を入手できるため、実習中には積極的に活用するとよい。



## 1.4 学内 Moodle

UNSW では、授業で先生と学生が情報を共有できるインターネットサービスである Moodle がよく利用される。Moodle では、各コースのページが設けられており、先生が授業の教材をアップロードしたり、学生が宿題を提出したり、イベントや授業についてのコメントを投稿したりすることができる。

担当学年によっては、実習生も Moodle を使用する。その場合、担当の先生により Moodle への追加手続きが行われ、先生と同様の権限で Moodle を使用できるようになる。なお、この追加手続きには丸一日の時間がかかるため、できるだけ初日に、担当の先生に手続きの必要の有無を確認した方がよい。

## 2.生活

管晶

### 2.1 費用

#### 2.1.1 仲介会社に支払う費用

まず、航空運賃、海外旅行保険等の費用を仲介会社に支払った。人によって異なる部分もあるが、以下、今回の場合を一例として記載する。

- ・航空運賃 282,310 円（航空券非用 264,000 円＋空港使用料 2,950 円＋国際観光客税 1,000 円、現地諸税 14,360 円）
- ・海外旅行保険 35,020 円（申し込み内容及び金額は人により異なる）

#### 2.1.2 渡航許可（ビザ）に関する費用

渡航許可（ビザ）に関する費用は、日本人学生か留学生かによって手続及び金額が異なる。日本円安の影響でビザに関する諸費用は以前より 1 万円程度高かった。留学生の場合は、ビザ代行申請 55,000 円及びビザ申請実費 15,000 円を、仲介会社に支払った。日本人の場合は、オーストラリアの電子渡航許可（Electronic Travel Authority (ETA)）を、仲介会社を通さず、個人で申請することができる。ETA は様々な代行会社を取り扱っており、会社によって価格は異なるが、JALABC の場合 990 円であった。

#### 2.1.3 その他の費用

上記に加え、宿泊費は一人当たり約 25 万円（詳細は後述する）、その他現地の食費、交通費、お土産代等に合計で約 20 万円かかった。

## 2.2 インターネット環境

### 2.2.1 Wi-Fi

Wi-Fi については、大学構内や民宿に備わっている。また、駅やショッピングモール等でフリーWi-Fi がある場所もある。なお、シドニー空港のフリーWi-Fi は弱めである。

### 2.2.2 SIM カード

上述のように外で Wi-Fi を利用できる場所が非常に限られているため、現地の通信会社の SIM カードを購入しておいた方が便利である。SIM カードは日本でネットショッピングのサイトであらかじめ購入しておく方法と、シドニー空港やコンビニ、スーパーなどで購入する方法とがある。日本で購入・設定する際は、アクティベートに 3 日ほど時間がかかるものもあるため余裕を持って用意しておいた方が良い。費用はだいたい同じである。

ただ、通信会社の店舗で購入する場合は、お店の人に設定してもらいすぐネット開通可能だが、スーパー等で購入して自分で設定する場合はつながるまでに 1 日ほど時間がかかるため、注意が必要である。日数・使用可能通信量・値段は様々なプランのものが販売されている。

## 2.3 交通手段

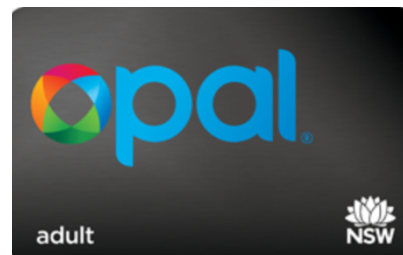
### 2.3.1 OPAL カード

シドニーでは、OPAL カードと呼ばれる交通カードが広く利用されている。ほぼ全ての公共交通機関において必要となる。シドニー空港の鉄道駅の改札窓口で、あるいは現地の

スーパーで購入することができる。OPAL カードの他、クレジットカードを使用することもできる。

OPAL カードのチャージ (Top up) は、opal travel というスマホアプリ、鉄道の駅、スーパー、ドラッグストア等ができる。また、opal travel は、チャージのほか、残額の確認等もできて便利である。

なお、週に 8 回以上にバスに乗った場合は、9 回目からは無料で乗れる。



### 2.3.2 各交通手段の特徴

移動方法は、Google マップ等のアプリでその都度検索するのが良い。以下に各交通手段の特徴を記載する。

#### ①バス

シドニーでは、バスがメインの交通機関である。いくつかのバスが停まる駅では、手を挙げてドライバーさんにサインする必要がある。車内でアナウンスやルートを表示は一切ないので、自分で Google map 等で降りる地点を確認する必要がある。また、バスは定刻から 5 分程度ずれることが多く、そして昼間は通常 10 分おきに来るため、時間に余裕を持って移動する必要がある。

スーツケースを持って乗るときは、スペースが限られているため、2、3 人ずつで別のバスに乗ると良い。



#### ②電車

電車の利用頻度は、バスと比較すると少ないが、シティ方面や観光などで少し遠出する際に使う。料金はバスとあまり変わらない。

#### ③トラム (路面電車)

路線は少ないが、車内でルートを表示とアナウンスがあるため、利用しやすい。電車はおよそ 8 分ごとに来る。社内のスペースも広い。UNSW High Street 駅に L2、UNSW Anzac Parade に L3 が運行している。



UNSW High Street 駅 (Gate 9 付近)

#### ④船

Taronga Zoo や manly beach 等、シドニー湾の対岸に観光に行く際に使用する。所要時間は 1 回のクルーズで約 20 分である。料金は \$5 程度であった。

#### ⑤タクシー等

シドニーでは通常のタクシーのほか、配車アプリがよく使われている。代表的なもので、Uber、Bolt、Ola 等が挙げられる。各アプリで登録してから 1~2 週間の間に割引クーポンが発行される。何人かで移動するときは、公共交通機関を使うのと同程度の金額で行けることもあるため、活用するとよい。

## 2.4 ショッピング

### 2.4.1 食料品

シドニーの物価は、全体的に東京より高い。特に食料品が高いが、牛肉やフルーツ（マンゴー、ネクタリン、洋梨、スイカ等）に関しては日本より安いものも多い。

食料品はスーパーで購入する。Woolworth と Coles という 2 大スーパーが至る所に見られる他、IGA という少し小ぶりのスーパーや、アジア系のスーパーなどもある。特にアジア系の食材や製品が欲しい場合は、大学近くの Randwick にある Coles の隣にアジアスーパーがある。

### 2.4.2 土産物

シドニー土産を調達する場合は、スーパーや土産物店を利用する。有名なチョコレート菓子の Timtam などは、スーパーで割引をしている時に買うとよい。また、酒類は高い印象だが、ワインは \$ 10 以下で美味しいものが買えるらしい。

土産物店はシティの観光地エリアにたくさんあるが、特に、セントラルの Market City のグランドフロアにあるマーケットがお勧めである。ぬいぐるみ、マグネット、キーホルダー、T シャツ等の多様なオーストラリアらしいお土産が安価で手に入る。

よく利用したショッピングモールは、主に Sydney Queen Victoria Building、Market City などである。

なお、シドニーではほとんどの店が 17 時頃に閉店する。毎週の木曜日はショッピングディと呼ばれ、その日だけ 21 時まで営業する。

## 2.5 観光

実習中、週末は教案作成が終わった後、シドニー観光に出かけた。ガイドブック等を日本から一冊持って行くとよいと思うが、以下に主要な観光スポットを列挙する。

- Opera House : シドニー観光の定番である。対岸から眺めるのが美しい。
- Harbour Bridge : オペラハウスの側から眺めると美しい。無料で橋を渡ることができるが、上に登るのは有料である。
- Taronga Zoo : 入園チケットの料金は \$39 である。コアラやカンガルを見ることができる。コアラを近距離で写真を撮ったり、触ったりしたい場合は、イベント時間を事前に調べる必要がある。バードショーやアシカのショー等、見所がたくさんある。
- Blue Mountains : シティから電車で片道 2 時間半ほどかかるが、美しく雄大な自然を堪能できる。
- Bondi Beach : 晴れている日は、海の色が本当に美しい。ビーチ近くにおしゃれなカフェや雑貨店等もある。ボンダイジャンクションには大きなショッピングモールもある。
- Watson bay : ここの砂浜は市内のそれとは違い、金色となっており、海も格段と澄み切っている。道端の花もピンク、赤、黄色、青、紫など様々な色をしている。シティから遠く離れており、バスで 1 時間以上かかるが、観光客にあまり知られておらず、地元の人々が楽しんでいる場所である。
- そのほか、シドニーにはハイドパーク、センテニアルパーク等、素敵な公園や植物園が沢山あるため、散歩に行ってみるのも良い。

## 2.6 宿泊施設

実習期間中、実習生は Airbnb で探した民宿に宿泊した。ホテルは民宿より少し費用が低く、2 日前にキャンセル無料であるが、大体ベッドだけが備え付けられ、たんすも 1 つ

しかなく、デスクもないため、長期の実習生活には推薦しない。宿泊先は出発する前の3カ月前より探すと選択肢が多くて、費用が低い。泊まる期間が比較的長いため、2カ月前に予約すると、コスパが良い物件がどんどん取られてもらうため、できるだけ早めに予約し、学校に近く、交通が便利な場所を確保した方が良い。

### 2.6.1 費用

今回の民宿の費用は、全日程通して総額 762,610 円かかった。参加した実習生は3名であるため、一人当たりの費用は 254,203 円である。

### 2.6.2 利用したシェアハウスの特徴

今回宿泊した民宿の具体的な所在地、大学までのアクセス、その他周辺環境について感じたことを以下、記載する。

- ・ 住所：5 Abbott St, Coogee NSW 2034 Australia
- ・ 大学までのアクセス：370 番バス（片道 \$ 3.73）約 15 分+UNSW の Gate8 まで徒歩約 1 分で所要約 16 分。
- ・ 周辺環境：徒歩 10 分ほどの所に Coogee beach があり、370 番バスの停車駅へ向かう道で海が見える場所である。その隣に大型スーパーの Woolworth がある。学校方面に徒歩 7 分のところで coles があり、学校帰りに行くと便利である。シティに行く場合は徒歩 4 分のところで 374 番のバスに乗ると約 25 分で着く。

### 2.6.3 シェアハウスの設備

- ・ 寝室：全部で 2 つの寝室があり、1 つの寝室にシングルベッドが 2 台、もう 1 つの寝室にクイーンサイズベッドが 1 台ある。マットレスなどが備え付けられていた。クローゼットやハンガーラックは両方の寝室にある。エアコンはなく、扇風機が 1 台ある。シドニーは海に囲まれていて、真夏でも蒸し暑いような暑さではないので、エアコンは生活必需品ではない。
- ・ リビング：ソファ、テレビ、テーブル、アイロン、ゴミ箱等が備わっている。
- ・ バルコニー：洗濯物を干す場所として活用したが、夜になる外の天気がとても快適だったため、バルコニーの椅子でのんびりしていた時もある。
- ・ キッチン：IH コンロ、電子レンジ、冷蔵庫、ケトル、包丁や鍋など料理に必要な基本的な道具がそろっている。食器類もある。食器用洗剤もあるが、スポンジは自分たちで購入した。
- ・ トイレ：トイレと洗面所、シャワールームは別室ではなく、ユニットバスであった。トイレットペーパーは、最初にいくつか置いてあるが、不足分は自分たちで購入した。ドライヤーは 1 つあったが、シャンプーやコンディショナーはなかった。
- ・ 洗濯室：洗濯機と乾燥機が 1 つずつ備わっていた。洗濯洗剤は置いてあるものの少量だったため、自分たちで購入した。
- ・ 食事：民宿はホテル等とは異なり、食事の提供はないため、各自スーパーで食材を入手し、自炊した。時には近くの店で外食した。なお、シドニーは東京に比べ、全般的に外食の費用が高い。

## 2.7 気候

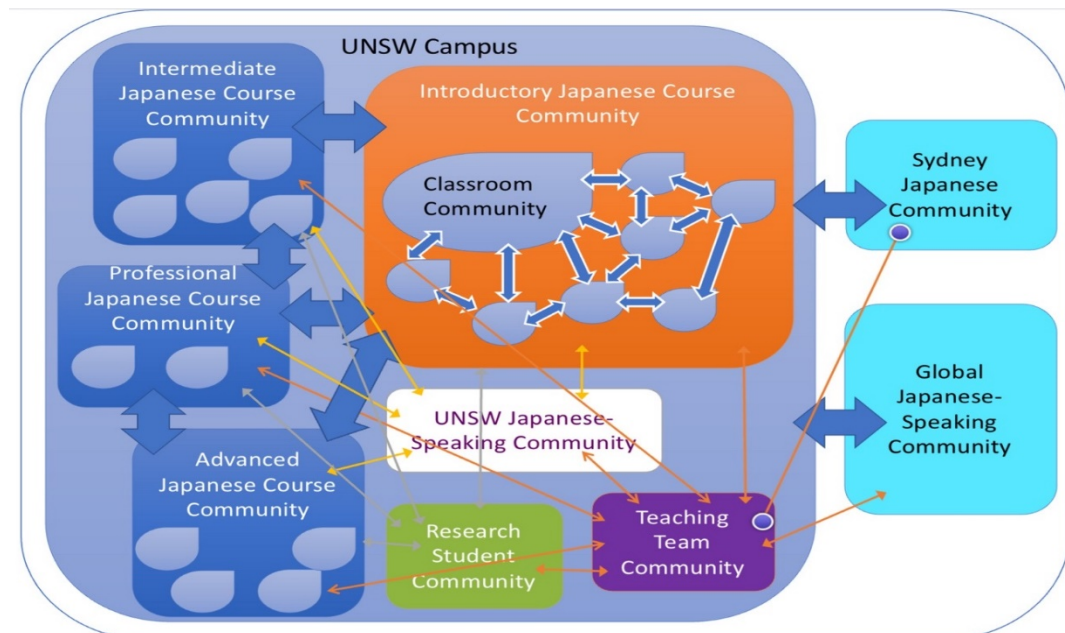
気温については、2023 年の夏は例年より高かったようであるが、到着する日の前日ま

でずっと雨が降っていたらしい。全体的に予想していたよりも涼しかった。2月の渡航直後は夏らしく日差しが強い日が多かったが、徐々に秋めいて涼しくなった。真夏の服だけでなく、ジャケットは2着ほど持っていった方が良い。ただ、晴れると紫外線がかなり強いので日焼け対策は必須と思われる。3月になると、薄手のセーターでちょうど良いくらいの肌寒い日もあった。昼夜の寒暖差が大きいため、羽織る物を持ち歩いたほうが良い。薄手のコートを着ることもあった。

また、天気については、シドニーは晴れが多いと言われているが、時に急にわか雨が降る。現地では手頃な傘が入手しにくいこともあり、日本から傘を持っていった方が良い。

湿度に関しては全般的に東京よりも低く、気温が高くても爽やかに感じられた。乾燥しがちなので、保湿クリームなどがあるとよい。

# 第3部 実習を通して学んだこと



実習の理論的枠組みである実践共同体（Community of Practice）の考え方  
（トムソン先生作成）



## 管 晶

### 1. 教壇実習からの学び

私はこれまでアジア圏における中国人日本語学習者として日本語学習を経験し、さらに自分と同じような教育背景を持っている人に日本語を教えてきた。一方、今回の教育実習を参加することを決意したのは、多言語、多文化共存のオーストラリアでは、教師が日本語授業に臨む際、どのような理念を持って、何を目標としているのか、また学生が言語学習についてどのように考え、どのような学習目標を設定しているのかについて知りたいと思ったためだった。

UNSW では Wenger が 1991 年に企業における徒弟制度の観察より提唱した実践コミュニティ理論を大学での言語教室で応用を試みているため、教室の中の学生同士につながりを持たせるために、教室での活動はなるべくペア、またはグループで行うようにデザインすることが大前提だとされている。特に毎週は目標会話を完成するために使われる挨拶、単語、文法などは先生が講義で教えられ、その後に行われるチュートリアルとセミナーは講義で教えた内容を消化・吸収することを促す目的で行われている。実習生が担当するのは練習目的の授業であった。

このような状況では、自分が従来のように教師としていかに語彙や文法知識の説明に工夫するのかということに焦点を当てるのではなく、いかに多くの練習する機会を作り、学生に会話練習してもらうことへと関心を寄せるようになった。最初はこのようなやり方に慣れず、つつい教えようとしてしまった。しかし、指導の先生からの助言で気づいたのだが、教室は一つの実践コミュニティだと考える場合、教室には目標項目の使い方を知らない学生がいるかもしれない反面、講義で一度教えられたので知っている学生もいるはずであるため、先生が先に答えを教えるのではなく、他に知っている学生がいないかを聞いて、学生に自分のクラスメートから何かを学んでもらうことが学びの一種である。その後自分がこの理念を実践してみたが、クラスメートの説明をそのまま納得した学生もいれば、あまりそれを信用せずもう一度先生に質問してくる学生もいた。身近の学生に助けを求めてもらうことが真の目的のではないかと考えている。

なお、他の人と一緒に教案を作ったり、授業をしたりことも私にとって新鮮な経験であった。授業の共同目標としては、すべての学生に練習する機会を最も多く与えると同時に、単なる練習に止まらずグループの人と日本語を話すことを楽しんでもらうことである。そこで、一人がアイデアを出して、もう一人がそこにさらに改善を加えるなどで、みんなが積極的に意見を出し合ったことにより、最後は教師と学生が共に楽しむことができる活動に仕上げられた達成感が得られた。その過程で、各自の長所が発揮できたが、一方意見が分かれることもあった。その解決手段として、まずはそれぞれ自分が最も適切だと思う活動を行い、学生の反応と学習結果を基に次のクラスで実施する活動の進め方を決めることにした。グループワークに楽しさも大変さも感じた。また、授業中に時間配分のことをお互いに注意したり、学生が活動する時の状況をその部分を担当する実習生に伝えたりして、みんなで良い授業を作るために助け合った。

### 2. その他の学び

多言語、多文化社会のシドニーは、母語や文化背景が異なる人々が共に生活することに少しも違和感を感じない都市であった。そこで、楽しく母語の中国語を話したり、日本語を話したりして、ありのままの自分をあまり躊躇なく出すことができると感じた。一方、世界に対する自分の視界が前よりずっと広くなり、枠も少なくなった。人との違いをより

楽しむことができたのが今回の実習で得られた学びの一つで、とても貴重な経験だと考えている。

一方、現地の学生や先生たちは歴史や政治問題の話と言及する時に、比較的に平等に接しようとしていた。それは国家間の歴史や政治的問題を忘れたからではなく、そこを乗り越えて「人」と「人」という個人レベルの関係として接触しようとする努力が潜んでいるのではないかと考えた。今回の実習では、自分を含めて2人の中国人と1人の日本人が共同で授業を担当し、同じ住居で生活したが、異文化を認め、理解することが初めてこれほど身近なものとして迫ってきた。しかし、それは容易にできることではないことが身をもって感じた。私たちは実習と生活の様々なところで接点を持っているため、摩擦も様々なところで現れてきた。それまでは人が受けてきた教育がどのようなものかについて、普段は感じる事がなく、そのため人の考え方や行動にそれらが大きな影響を与えることに気づけなかった。それを気づかせてくれたこと、そしてその摩擦を克服するために解決策を模索してみたことも今回の実習で得られた学びであった。

### 3. 今後に向けて

これまでは日本語を教えることに重点を置いてきたが、今回の経験は、言語、および言語教育をどのように捉えたらいいかについて考えさせる良い機会となった。今後は、学習者に言語知識を教えるだけでなく、様々な活動を取り入れることで、教室の人と人につながりを持たせ、楽しい言語学習の経験をしてもらい、言語学習の動機づけにつながるような授業をしていきたいと考えている。

また、今回の経験でさらに言語が国際間の相互理解のための窓口となりうることを改めて気づかされた。これからはより多くの人にその国について知ってもらうための言語教育についても研究を続けていきたいと考えている。



中尾 祐香

## 1. 教壇実習からの学び

教育実習を通して学んだ学びは大きく2つある。

1つは教師像についてだ。私が今まで抱いていた教師像とは「何でも知っている完璧な人」というもので、極端ではあるが、学生の前では間違いをすることは恥であるといった認識を持っていた。しかし、それは違うことに気づいた。教師も人間であり、間違えることはあるということだ。教案を皆で作りと、念入りに準備したとしても実際に授業をしてみると想定外のことも多々起こる。その時は、周りの学生やジュニア先生、実習生に助けをもらうことで、授業を行うことができるということを学んだ。何事も一人で背負うのではなく、皆で助け合うことが重要であることをこの実習を通して得ることができた。例えば、授業の時間迫っている際は、他の実習生に声をかけたり、困っている姿が見受けられたらサポートしたりするなど、皆で連携して授業を運営することができた。

また、私の中で最も難しかったのが、教師の役割についてだ。実習中、先生方から「教えずぎず、先生は指示するだけで良い」という助言をいただいた。聞いた時は指示するだけならそんなに難しくはないかと思ったものの、実際に教案を作成し、教壇に立ってみるとどうしても教えなくなってしまう。学生が答える前に教師側がつい言うてしまうほか、細かい文法説明をしようとしてしまうが、それを堪えることが非常に難しく、慣れるのに時間がかかった。しかし、途中で学生が質問したことに対して先生が全て答えるのではなく、教室にいる学生を使って質問に答えられる学生に、その質問に答えてもらうように促すのも教師の重要な役割であることに気がついた。先生方が教室のリソースを有効に使うと良い、と助言してくださったが、教師が学生に答えを簡単に教えるよりも、学生が学生に教える方が、違いの言語教育的にも相互に良い影響を与え合うのだと学んだ。これが、実践コミュニティを行う上での醍醐味ではないかと考える。

2つ目に言語教育そのものの目的である。教授方法は様々であるが、私自身、本実習中に言語教育の目的は何かを考える機会が非常に増えた。もちろん、資格や受験のために勉強することも大きな目的の一つである。しかし、本コースではJLPTなどの資格を取得するというよりも、日本語を学ぶことで様々な人と繋がれること、意思伝達ができるようになることを目標としているコースである。そのため、ペアやグループで話す機会が多かったが、これもCommunity of Practiceの一環であり、教育を通して人との付き合い方や皆で支え合って生きていくことの重要性を伝えているのだという学びを得た。これらの学びは、おそらく実習に参加しなければ気づけなかったことだと確信している。このような教育機会を受けている学生を羨ましく思う反面、世界にもっとこのような教授法が広がってほしいと思った。

## 2. その他の学び

わずか5週間という短い期間であるが、教壇実習以外のところでも多くの学びを得た。オーストラリアは多文化主義の国であり、日本と多くの違いが見られ、非常に興味深かった。私は以前から多文化共生や異文化理解といった分野に興味を持っていたため、オーストラリアに行くことを非常に楽しみにしていた。実際に市内は様々な文化が融合しており、世界の様々な料理が一つの街の中で食べられるのはシドニーの魅力の一つであろう。このように文化が融合していることがいわば当たり前であり、日本ではあまり見られない光景だと感じた。また、大学で学生と話してみると、英語以外に言語が話せるのは一般的であり、会話の途中で英語から違う言語に変わるなど言語スイッチの

変換が所々で見られた。このように、バイリンガルやトリリンガルの学生がほとんどであった。日本人の私からすると、非常にかっこよく映るが、シドニーではそれが一般的なことであるため、少々驚いた。また、日本語初級の学生とは英語以外の言語が少しでも話せると、やはり視野が広がり新たな価値観や人脈の輪が広がるため、シドニーに滞在してから外国語をもっと勉強したいと強く思った。

加えて、5週間の共同生活は非常に貴重な経験であった。実習生3名は中国人2名、日本人1名で、共同生活を送ることはこの先もあるか分からない。私自身、家族以外と寝食を長時間共に過ごしたことがなかったため、戸惑うこともあったが、問題があれば話をし、部屋の電気が止まって困った際も大変ではあったが3人でなんとか乗り越えることができた。また、周りに日本語母語話者がほとんどいない中で、母語話者としてどのように彼/彼女らと交流すべきか、話す際の姿勢を考えることもしばしばあった。互いを尊重することの大切さや相手を配慮すること等、日々の生活を通して改めて気づいたことがたくさんあった。大変なことも多くあったが、一生忘れられない濃く充実した実習期間となった。

### 3.今後に向けて

実習前は、先生として教えることに対して苦手意識を抱いていた。それはおそらく、先生が「完璧」であり、何でも知っている存在でなくてはならないとイメージしていたからであろう。しかし、今回の実習を通してそうではないことを知った。教育実習を通して、人は一人では生きられず、助け合うことで生きていることを改めて学ぶことができた。それは教師だけでなく、この日本語コースの実践コミュニティを通して学生自身も同様のことを学ぶことができるだろう。

そして、何より学生と日本語や英語を通して交流できたことが本当に楽しかった。ここで得られた経験は、一生忘れられない私の財産となるだろう。卒業前にこのような経験ができて本当に良かったと思う。実戦コミュニティや共同生活、シドニーで生活して得られた知見や価値観を、社会に出て還元していきたいと思う。



## 車 睿雯

### 1.教壇実習からの学び

私はこれまで日本語教育経験が少なく、中国人の学生に一对一で日本語を教えた経験しか持っていなかった。今回の教育実習を通じて、初めて多人数で、学生の文化背景が多様で、母語が中国語だけではないクラスを担当した。

まず、新しい教育理念を体験した。実習する前に、自分が担当した日本語授業はほぼ自分が先生として授業の中心になり、学生を連れて学んでいく形だった。今回の実習で、異なる教育理念に触れ、学生が授業の中心になってもらい、学生の主体性を発揮することの重要性を感じた。「授業で先生の役割を最小限にする」、「先生が見えない授業」などの言い方は印象的だった。

また、なぜ UNSW の日本語コースが「実践コミュニティ」を重視するかについて、自分なりに理解ができた。一週目の時に、学習者は新しく授業に参加し、知り合いがいない状態で受講し、先生の後について学び、周縁的参加者になり始めた。2週目と3週目の授業でのペアワークやグループワークを通じて友達ができ、お互いに助け合って勉強していく姿がどんどん現れてきた。そして、4週目と5週目の授業で学生の主体性がより強くなり、コミュニティで楽しく日本語を勉強するようになった。こういうコミュニティの繋がりで日本語の勉強が楽しくなり、学習者の間に日本語を使うチャンスも増えていくのだと感じた。

最後に、教案作りや授業を担当するなどの活動は全部実習生の3人がグループワークでできたので、グループワークの重要性と進み方についてもいろいろ勉強できた。お互いに助け合って、意見を交換したりすることで、よりスムーズに仕事を完成することができると感じていた。また、他の人のコメントを聞き、グループメンバーの意見を受け入れることもグループワークで不可欠だと感じた。



### 2.その他の学び

まず、英語に対しては最初、自信がなかったが、自分の心の中の怖さを克服し、現地の学生と英語で話すことができるようになった。長年使っていなかった英語を思い出して頑張って話したことで、英語の会話力が上達したと感じた。

そして、まだ慣れないオーストラリアで、シェアハウスの電気が止まったり、病気になって病院に行ったりなどの困難が起こった場合、どのように冷静に対処するのかについて勉強した。

また、オーストラリアにいる時に、ちょうど LGBT に関するデモがあって、オーストラリア人が多様性に対する寛容さや理解を実感した。そのほか、オーストラリア人のライフスタイルを観察しながら、やはり東アジアと違うところが多いと思った。例えば、お店の営業時間や人々の話し方など、いろいろ体験して勉強になった。

最後、福井先生の紹介で中国語コースの先生方に連絡を取り、中国語の授業を見学する機会をいただいた。自分の母語である中国語をオーストラリアでどのように教えるかを見ることができた。

日本語と違い、自分は第二言語として中国語を勉強したことがないので、初めて文法説明を聞いたら、面白くて難しいと感じた。

### 3. 今後に向けて

今回の教育実習で、新しい教育理念に触れ、他の人の意見を聞き、アジアと違う文化を体験し、自分と違う考え方を受け入れることができた。これらの経験を持って、今後はより包容力のある人になりたい。

私はこれから就職し社会に出ていくが、その仕事は日本語教育と直接的な関係はない。しかし、困難に遭う時どのように乗り換えるのか、人間関係で問題が生じた時にどのように解決するのか、新しい環境にどのように早く慣れるのか、というような問題に対して、新しい理解ができたと思う。また日本語を教える機会はきっとあるに違いない。オーストラリアでのこれらの経験をこれからは活かせると信じている。5週間は長い時間ではないが、自分にとって忘れられない思い出で、人生の中の宝物だと思う。

## 総評

森山新

今回参加した3名の大学院生活は、コロナ禍ということもあり、そのほとんどは1人の孤独な戦いであったのかもしれない。在学中コロナに見舞われ、在宅でのオンライン授業も少なくなかった。さらに研究を中心とした大学院生活は、だれかと共に学ぶという機会が多いとは言えない。もちろん授業やゼミなどでは他の学生や担当の教員とともに学ぶのであるが、学部時代と異なり、ほとんどの時間は個人で自身の研究目的に立ち向かい、その答えを見出すための孤独な戦いである。

そのような中、3名はようやくコロナ禍を脱し、日本を脱し、研究という孤独な戦いを脱し、遠い南半球、シドニーへと旅立った。最初は、オペラハウスに感動し、シドニーの青空と青い海に心が洗われ、コアラとカンガルーに心癒されたに違いない。

学生たちはシドニーという新しい地に足を踏み入れると同時に、「実践コミュニティ」という新しい世界にも足を踏み入れた。事前学習を通じこの考え方は知識としてそれぞれにしっかり頭の中に入っていたことだろうし、そのような中で各自は、日本語教育についてのさまざまな社会的な学びを得て帰るものと思って実習を始めたであろう。

実際に、3人の「教壇実習からの学び」を読むと、みな5週間余りの実習を通じ、「日本語を教える」という点において、実践コミュニティの中で多くの学びを得ることができたと思う。何よりも、教師が教え学生が学ぶという一方向的な従来の考え方を再考し、学習者が教え合い、協力し合いながら社会的に学ぶ、そして教師はそれをサポートするという新たな考え方の重要さに気づけたことが重要である。それは将来日本語を教える際に多に役立つことは間違いない。とりわけ UNSW の教授法は彼女らの母国である中国や日本の主流となっている教え方ではない。中国も日本も、銀行型の教師観が支配し、知識は教師が与え、学生は教師からその知識を受ける存在という考え方が今も支配的である。その背景には、日本や中国に支配的な価値観や文化等に裏付けられた、教師と学生、国家と国民、年長と年少といった二者間の関係に当たり前の如く存在している非対等な関係性があるように感じる。教師が主であり、学生はそれに従うべし、国家が主であり、国民はそれに従うべし、といった構図である。しかし学生が、国民が、こうした受動的態度を変え、主体的な立場に立たない限り、真の教育、真の政治はあり得ない。そのような意味で彼女らが受けてきた第二言語教育とは大きく異なる UNSW での教育実習から大きな学びを得、各人がそれぞれに大きな成長をなした（また今後もなしてほしい）と確信している。

しかし実習には一定の成果を成し遂げた彼女らには、もう一つの実践コミュニティが待ち受けていた。それは毎日の実習を終え、帰宅後に待ち受けていた。3人は生まれた国、文化、個性など、多くを異にしていた。また3人の間で用いる言語は日本語だが、日本人は3人の中でマイノリティであった。そういった環境の中での「実践コミュニティ」は必ずしも容易なものではなかった。いやこの地球上のほとんどの人たちが一生かけても解決することが不可能なほど困難な課題である。それは異文化理解、多文化共生を果たす上で待ち受けるリアルな困難さでもある。だれしも目的を一つにコミュニティを作り、目的を達成しようとするのは望ましいことであり、そうしていこうとするだろう。だれしも異なる文化の人を理解し、相手の文化を尊重し、共に生きていくべきであると考えよう。ここまでは大学の授業の中でも容易に到達が可能な、知識のレベルの到達点である。であるからこそ、実習に臨む前には3人はその困難を予知する術もなかったのかもしれない。

しかし現実にはそれほど容易なものではない。そこにはこれまで当たり前としていた、自分に対するクリティカルな態度が求められ、異なる他者に対する寛容さが求められる、極めて困難な課題である。

もちろん、今回の実習は日本語教育の実習であり、異なる他者がともに生きていくための実習、異文化理解、多文化共生のための実習ではない。しかしどのような実践でも、実践のためのコミュニティでも、そこには異なる他者がいる。異なる他者と心をつにし、目的をつにし、ともに学び、ともに成長していくことが求められる。その意味においては日本語教育実習と生活の中で異なる他者とともに生きることは決して切り離すことはできない。どちらもコミュニティをいかに形成し、共通の目的を達成するかについての、知恵が、内省が、そして行動が問われる。

異なる他者を目の前にしたとき、異なる他者の理解できない態度、異なる他者の理解できない価値観、異なる他者の理解できない言動に出会うことになる。それぞれは母語が異なり、受けてきた教育が異なる。そうした違いにより、当たり前とする文化や価値観が異なり、その結果、当然葛藤が生まれる。誤解が生まれる。対立になるかもしれない。それがこの世の中の偽らざる現実である。

3人の行く手にはこのような異なる他者との出会いが無数にある。世界中に溢れるコンフリクトはそのような異なる他者との間に、それぞれの間が存在する差異を克服できずに生まれるものだ。それをどう乗り越えるか、により、その人の未来は大きく変わっていく。避けて通ろうとするのか、それとも真正面から取り組んで克服しようとするのか。自己の当たり前をクリティカルに見つめることなく、他者を退けるのか、自己の当たり前をクリティカルに見つめながら、異なる他者の、最初は理解し難い差異を受け止め、理解しようと努めるのか。だれにとってもこの問題は避けて通ることはできないし、だれにとっても容易に克服できるものではない。

何人かはその困難さを今回感じる事ができたのではないかと思う。いや、感じる事ができた人は大きな学びを得た人だ。しかし、心のどこかで、相手に責任があり、私が悪いのではない、という結論を下している人がいたとすれば、残念ながらその人はこの、大切な学びを得られなかったのではないかと思う。そしてこうした学びが得られた人に次に与えられる問いは、それをどう乗り越え、理解し、ともに生き、実践コミュニティを、多文化共生を実現できるかである。3人の中にはその課題に取り組み、既にその一部を成し遂げたかもしれない。だが、この課題の困難さを考えた時、それを本当に解決するのは、実習のわずか数週間では不可能で、今後、この課題に長い時間をかけて取り組んで行く他はないと考えている。

5週間余りの日本語教育の実践は、UNSWの先生方と尚友倶楽部の皆様の温かなご支援の中で、参加した学生一人一人に大きな学びと成長をもたらしてくれた。この場を借りて心から感謝したい。ただ、もう一つの実践コミュニティについては、今回の実習での学びを土台に、これからの人生において長い時間をかけながら、じっくり取り組み、異なる他者が共に生きるこのグローバル時代に、対立でなく、和解をもたらす、そんな人材として育ててくれることを期待したい。それは多様な異なる他者がともに生きるこの世界がめざすゴールでもあるが、第二言語としての日本語教育がめざすゴールでもあると思っている。



## 編集後記

中尾 祐香

本教育実習は新型コロナウイルスの影響で3年間実施することができなかった。しかし、今回ようやく実際に UNSW に足を運べるようになり、ついに実践コミュニティや世界の日本語教育について直接御指導を受けることができた。

本実習では様々な方々にお世話になった。まず、尚友倶楽部から奨学金をいただいたおかげで、5週間に及ぶ海外実習を金銭的、心理的にも少ない負担で実施することができた。円安や燃油サーチャージ代の高騰など様々な理由から、例年に比べ、費用が高くなってしまい参加を断念せざるを得なかった学生もいた、しかし、卒業前の最後の休暇を使って実習に臨んだ者や、コロナ禍で行けず機会をうかがって今回ようやく参加できた者などそれぞれの想いを胸に、ご支援いただき、私たち3人が貴重な経験をする事ができた。心からお礼を申し上げたい。

さらに、UNSW の先生方は、新学期が始まり忙しい時期にもかかわらず、私たち実習生を温かく受け入れ、熱心にご指導してくださり本当に感謝している。トムソン先生、福井先生、飯田先生、岡本先生、橋本先生、鄭先生、中島先生、様々な先生方に本当にお世話になった。

また、実習担当の森山先生には、沢山のご指導とご尽力を頂いた。事前研修での実習に関する理論的なご指導はもとより、シドニーに滞在中の私たちの身辺について先生が滞在中のみならず、帰国されてからもご配慮いただいた。さらに、滞在先の手配に関する事務手続き等も助けていただき、優しく細やかなお心遣いに非常に感謝している。

多くの方に支えていただいて実現したこの経験を、今後の研究生活や人生において生かしていきたい。来年度以降もこの実り多い実習が続くことを願い、今後も多くの学生が参加できるよう、私たちがバトンをつないでいきたい。

### 2022年度ニューサウスウェールズ大学海外日本語教育実習報告書

発行日 2023年3月31日

発行 お茶の水女子大学大学院日本語教育コース

住所 東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学

電話 03-5978-5211

URL <http://www.dc.ocha.ac.jp/m/c-cultures/jle/>

編集 参加者一同・森山新